

保育にバランス感覚を

秋山 和夫

新しい幼稚園教育要領や保育所保育指針に基づいた実践が軌道にのってきている。新しい要領や指針は、幼児保育の本質についての考え方や、保育方法についての具体的な手がかりを明確に提示した点で、評価すべきものであると考えている。

しかし、現場の実践場面においては、必ずしも、その精神が十分理解されないで、さまざまな誤解も生まれている。そのようなものを少し紹介してみよう。

「幼児一人一人の発達の特性及び個人差に応じる」保育が大切だということで、幼児を一か所に集めてはならない。

「幼児の主體的な活動」を中心に指導を展開していかなければならないので、保育者が指示や命令をすることによって、幼児を活動させてはならない。

「環境を通して」保育を行うべきであるので、環境の準備は極めて大切である。保育者の援助というのは、幼児が環境とのかかわりにおいて活動を始めた後で、保育者が行うべきことである。この場合、幼児が活動を始めようとしないうちに、保育者はどうすればよいのか。

このような誤解は一般的でないのかもしれない。しかし、保育方法についての話し合いが、たて前の議論から、本音の話し合いに入るに従って、そうし

た疑問がポツリ、ポツリと出される。

たしかに、新しい要領や指針は、指示・命令型の、あるいは、画一的な保育の克服をめざしている。そのために「幼児の主體的な活動」とか「環境を通して」とか「幼児一人一人」「個人差」といったことばや表現が、新しい保育のキー・ワードとして重要視されることになる。そのことは正しい。

しかし、保育の実践を行う場合に、そのことだけで、望ましい保育ができるとは言えない。幼児を一か所に集めて、保育者が幼児に指示を与えることも必要となる。幼児全員が同じ活動をすることも必要だとは言えない。保育者がリーダーシップをとって、幼児と遊ぶことも必要になることもある。

自分の好きな活動を主体的に行えるが、保育者の指示する活動は絶対に行わないといった幼児では困るのである。

「指示・命令」はだめで、「助言・方向づけ」でな

ければならないという「あれか」「これか」という二極構造の中で、どちらかの極に立って、他方の極の考え方は否定されるべきであるという発想は、克服されるべきである。

例えば指示・命令型の画一的な保育が主流であったので、これを改善するために、幼児の主体性や個人差を大切に、環境を通しての保育をもっと重視していこう、という観点に立つべきであろう。

これまでの保育をより良くしていくために、新しい考え方や視点を導入していこうということであって欲しい。弁証法でいう、正反合の精神で、保育実践への理論の導入を考えていくことが必要ではないか。

バランスのとれた幼児を育てていくために、保育者自身がバランス感覚を磨いていくことが何よりも望まれる現在である。

(岡山大学)